<巻頭言>

「ダム技術は総合技術」であり「基準は超克されるべきもの」である

廣　瀬　利　雄*

「ダム技術は総合技術である。」力学，地質学，コンクリート工学，更には，機械工学，電気工学，道路工学，鉄道工学，生態工学さえも包含する総合技術である。

ダム技術以外の他の分野をみてみると，近年，総合化の方向というより，分科化している傾向にある。例えば，医学界をみてみよう。従来は，内科，外科，眼科，産婦人科等の専門分野に限られていたのに，近年は分科化が急速に進んでいる。外科１つをとってみても，心臓外科，胃外科，肺外科，膵臓外科と専門医が細分化されていると聞いている。従来は，１人の医者が，１人の患者に対座し，問診等で病因を把握し，治療していた。西洋医学が細分化され過ぎたため，総合的診断法の東洋医学が，最近再評価されていると聞いている。

日本大ダム会議の現状に眼を向けてみよう。多くの分科会が設けられている。総合的ダム技術の視座からみて，各分科会の連携は適切かつ十分であるか。各分科会がダム技術全般からみて如何なる位置を占めているのか，いかなる役割を果そうとしているのか，何が今重要課題なのか等を検討することが，今こそ，必要ではないのかと判断した。幸い，日本大ダム会議には，技術委員会が設けられており，各分科会会長が委員に委嘱されている。技術委員会において，各分科会会長が一堂に会し，重要度の高いと考える問題点を抽出し，抽出された課題について精力的に，積極的に意見を出し合い，意見の概略的集約化を試みている。その結果概要は，大ダムNo.160号に掲載予定である。ついては，各分科会はこの報告を参考とされ，各分科会の役割りを再認識され活動されることを期待している。

「基準は超えるべき，変えるべき性格のものである。」ダム技術においても，種々基準が定められている。ダムは，この世に唯一つ，同じもののない構造物である。気象，地質，材料，目的全てが同じダムはない。各ダムは夫々の時点に，それぞれの場所で，それぞれの目的の総合的判断に基づいて建設された構造物である。勿論基準に基づいて建設されている。基準とは技術の社会に対する約束事であり，

* ㈳日本大ダム会議副会長　㈶国土開発技術研究センター理事長

技術的目安でもある。社会状況の変化と共に，技術的進歩と共に変えてゆくべき性格のものである。ところが，ひと度基準が制定されると，変えられないものと錯覚している技術者に会い吃驚することが，間々ある。基準を重視する余り，現実と対比して，たとえ不都合，不適合が生じていても基準は絶対であり，変えるべきではないと判断しているのだろうか。基準は社会に対する技術上の約束事であるから勝手に，任意に変更してよいものではない。社会的ルールに従って変更すべきことは当然である。

なお，技術の進歩，向上を図るためには，不断の努力が必要である。更に言えば，技術面で去来する技術上の不安と戦わねばならない。現在の基準で恙がなく処理，運営されている現状を変えるわけであるから，精神的不安を感じるのは当然である。何を好き好んで自分だけ苦しまなければならないのかと思うだろう。現状を変革するためには，自ら進んで，自らを緊張の，不安の淵に投込まねばならない。技術開発，技術革新の必要性を慫慂すると，即座に新らしい基準を先ずつくってくれという若い技術者がいる。本末転倒である。基準と現実との斗争の積重ねの結果が新らしい基準として初めて集約されるのである。基準が先にあって実施が次にくるのではない。ダム技術者は現場をみつめ，現象を熟視し進んで自らを緊張状態におき，不断の研鑽を重ねる心意気が，常に求められているのである。